ロマン主義の時代

～「近代芸術」というイデオロギー～

（1800年頃～1914年頃）

サウンドデザイン演習

女子美術大学　石井拓洋

ishii05042@venus.joshibi.jp

ロマン主義の芸術を通して
「近代芸術」の特徴の一端、
とくに「自律化」を考えたい

本日の要点

- 「芸術」という概念は「近代」の所産にほかならない。 [小田部：3]

- 「藝術 は西洋近代の市民社会が生み出した『考え方』である」
  [国安：ii]

- 「『芸術』がこのように高い地位を獲得しはじめたのは、人類史から見てもきわめて新しい現象であり、決して普遍的な現象ではなく、西洋『近代』の特有な思想であったことを確認しておく必要がある」
  [松宮 ：132]

- 「〔近代の〕藝術に内在した根本動向は純粋化の追求であった」 [国安：142]

ロマン主義の時代と主な地域

- 時代区分 : 1800年頃 ～ 1914年頃 (第一次大戦)
- 主な地域 : 西ヨーロッパのみ (特にドイツ)

ルーツとしての 「ロマンス」*romance* の語

ルーツとしての 「ロマンス」*romance* の語

- 「口語的なラテン語で書かれた中世の騎士道物語」のこと

→ 代表例『アーサー王物語』

- 5世紀頃のイギリスを舞台にした物語。
- 素性の解らぬ少年が、剣（エクスカリバー）を金床から引き抜く
- そのことで彼は自らがアーサー王であることを知る
- 彼の家来達「円卓の騎士」らによる、戦い・冒険・恋愛の物語
- ヨーロッパ的倫理観 騎士道が描かれる → ロマン主義的精神（無私、勇気、強さ、慈悲）

※ この物語の内容は、後の名作における題材として度々取り上げられる

- 騎士「イゾルデ」や「パーシヴァル」（ヴァーグナーの楽劇へ）

『アーサー王物語』

石に刺さった剣をぬくアーサー王

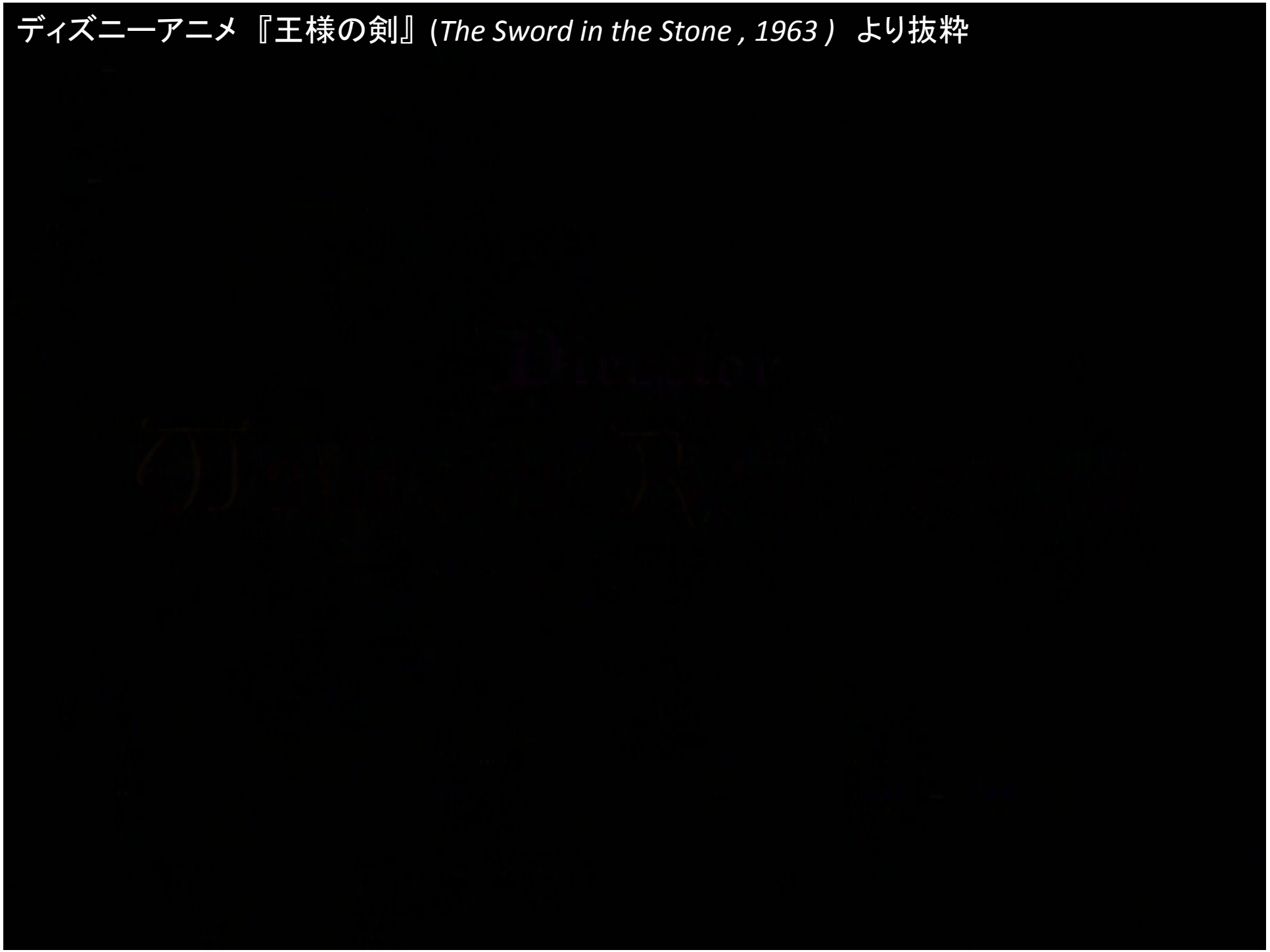
アーサー王と「円卓の騎士」たち

「アーサー王物語」を手軽に知るために　1

・ディズニーアニメ『王様の剣』(*The Sword in the Stone , 1963)*

[映像] (抜粋, 4分程度)

ディズニーアニメ『王様の剣』(*The Sword in the Stone , 1963)* より抜粋



「アーサー王物語」を手軽に知るために　2

・東映アニメ『円卓の騎士物語・燃えろアーサー』(1979)

（第1話　風雲児アーサー）

※　第一話「石に刺さった剣」のシーン　00:17:00 ～

※　物語内容としてはディズニーのものよりも原作に忠実

無料動画「gyao」内での配信あり　（retrived : 2013-7-3）

http://gyao.yahoo.co.jp/p/00722/v09857/

啓蒙思想 から ロマン主義へ

啓蒙思想 から ロマン主義へ

- 「ロマン主義的反動」

「啓蒙とは理性と進歩を旗印として、真・善・美の創造者としての人間の神格化を目論む思想であったが、おのれの要求の過大さにみずからが圧倒され、ひそかな逃げ道を準備せざるをえなくなる」　[松宮 2008: 157]

「ひそかな逃げ道」 → 合理主義精神の超越 → ロマン主義思想

「疾風怒濤」の文学運動（感情に理性と並ぶ権利を主張した，ゲーテなど,)

※とはいえ、ロマン主義思想とは、啓蒙思想の対概念ではなく、あくまで啓蒙思想の〈その内部の範囲内での反動〉である。

自律化する「近代芸術」

自律化する「近代芸術」

・じりつ【自律】
  - 自分で自分の行為を規制すること。外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること。[広辞苑]

・「西洋の近代藝術を規定している根本動向は自律化・純粋化の運動であると言われる」[国安 : 30]

・啓蒙思想の「本質主義・還元主義」のあらわれ
・〈唯一絶対の真理の本質〉を より純粋な形で呈示しようとする
・主体性・独自性・創造性を尊ぶ、人間中心主義のあらわれ

自律化する「近代芸術」

・「自律化・純粋化」を目指すとは、芸術が芸術の外の諸規定から自由となり、自分自身で成り立つ自立した存在となること。

自律化する「近代芸術」

・「技術」(art)　からの区分と、あらたな領域としての「芸術」の誕生

-「機械的技術」(職人的技術) と「美しい技術」(beaux-arts・仏)
の区分の確立　[シャルル・バトゥー『芸術論』(1746)]

- 近代までの絵画や彫刻などの「技術」を特徴づけるものは
第一に「模倣」であり、それらは「美」とは結びついていなかった。

-「美」= 直感的に知覚される 普遍的な心地よさであり、精神や人格を高める
価値を持つもの　(カント「美的技術」『判断力批判』= ドイツ観念論哲学)

- 絵画・彫刻の他、かつて学問領域であった「音楽」と「文学」をも
新たに加えて、技術から美的に独立した、
「芸術」という領域が近代において誕生する。

自律化する「近代芸術」

・「独自の内的法則」で作品を成立させることへの志向の帰結

→「絶対音楽」へ（ベートーヴェンなどの交響曲から 12音音楽へ)

→「抽象絵画」へ（セザンヌからキュビズムへ、など）

・「模倣」から 不純な要素をとりさった「抽象」へ

-「すべての芸術は音楽の状態に憧れる」 ウォルター・ペイター『ルネサンス』(1873)

・自律化 =「独自の内的法則」= 生物モデルによる「有機的生成の原理」

- 諸部分が相互間に必然的脈略をもって結合〔するような作品〕
- 単一種子から連続的変形によって成長する〔するような作品〕

[国安 : 42]

自律化する「近代芸術」

・ 具体的瑣末な「内容」よりも、本質的要点を示す「形式」へ

(ex.)

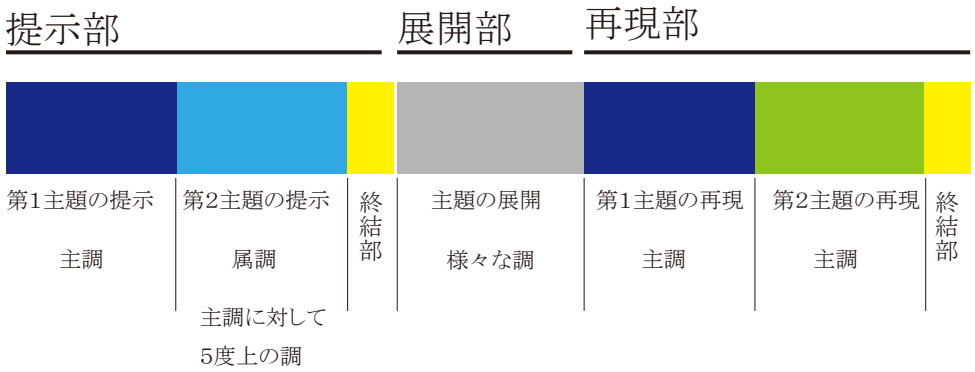
→ リンゴの本質は「赤い球体」であり、
リンゴを具体的に描写するよりも、「赤い球体」を描くことが、その本質を捉えるもの。
さらに絵画独自の平面性を追求すると展開図的になる。

→「形式主義」 への帰結

- 音楽はもとより「形式」重視の傾向がある (ソナタ形式など)
- 絵画もまた、セザンヌをへて、キュビズムなどへ

音楽形式（ソナタ形式）の拡大

【古典派のソナタ形式】



【ロマン主義のソナタ形式】

※展開部の充実
※序奏と後奏の充実

人間的な精神的価値 =「美」を尊ぶ「近代芸術」

人間的な精神的価値 =「美」を尊ぶ「近代芸術」

・カントの概念「美的技術」（著作『判断力批判』にルーツあり）

- 職人的な効用技術と「美しい技術」や「美的技術」の区別
- 精神や人格を高めることにおいて価値のある技術
- その価値とは、感性を通じて直感的に「快」がえられるもの

・ただし、近代が志向するのは、
「個人としての人間の孤立した内面」における精神的価値。
（社会的存在としての人間の精神性ではない）

[国安 : 77]

→〈文学と音楽との融合〉 R.ヴァーグナー「楽劇」

ロマン主義的作品の傾向 (その他)

ロマン主義的作品の傾向 (その他)

・「夢」（古代や未来への意識）、「霊感」（神秘主義）の重視

・異国情緒

※ チャイコフスキー、ヴァーグナーなど

※ いずれも「個人としての人間の孤立した内面」に関わる問題

「ロマン主義の音楽」の特徴

- 自律を志向する 絶対音楽の隆盛と、形式主義の拡大
- 個人の内的世界を表現する
  文学と器楽音楽との融合としての「標題音楽」や「楽劇」
- 抒情的で感情にうったえる旋律
- 和声の発達 （自由な転調／半音階的和声）
- オーケストラ編成の拡大（特に金管楽器と打楽器の充実）

オーケストラの規模の拡大

【古典派】

(想定：ハイドンの交響曲）

人数：50名程度

編成：2管編成

※ トロンボーンとチューバは無し

※ 打楽器：ティンパニ1対（2個）のみ）

※ 弦楽器: 40人程

【ロマン主義】

(想定：ヴァーグナーの楽劇）

人数：100名程度

編成：4管編成

※トロンボーン 3 ／チューバ 1

※ 打楽器：ティンパニ2対（4個）他

※ 弦楽器： 60人程

ロマン派の作曲家

フランツ・シューベルト
Franz Peter Schubert
（1797-1828）

《歌曲集：冬の旅》op.89 (1827)より
第５曲「菩提樹」
———
《魔王》(1815)

ドイツ・リート（芸術歌曲）で有名な作曲家。
文学と音楽との融合と捉えることができる。

ロマン派の作曲家

ロベルト・シューマン
Robert　Schumann
（1810 - 1856）

ピアノ曲《子供の情景》op.15 (1838)より
・ 第1曲「見知らぬ国」
・ 第7曲「トロイメライ」

作曲家であり評論家としても有名。評論では
ドイツ音楽の地位向上に貢献した。
ショパンの才能を発掘したことでも有名。

ロマン派の作曲家

ドラクロア作『ショパン肖像画』

フレデリック・ショパン
Fryderyk Chopin
（1810 - 1849）

ピアノ曲『12の練習曲』op.10 (1831)より
第5番 変ト長調 「黒鍵」

ポーランドの「ピアノの詩人」。
ピアノの表現様式の開拓に貢献した。

ロマン派の作曲家

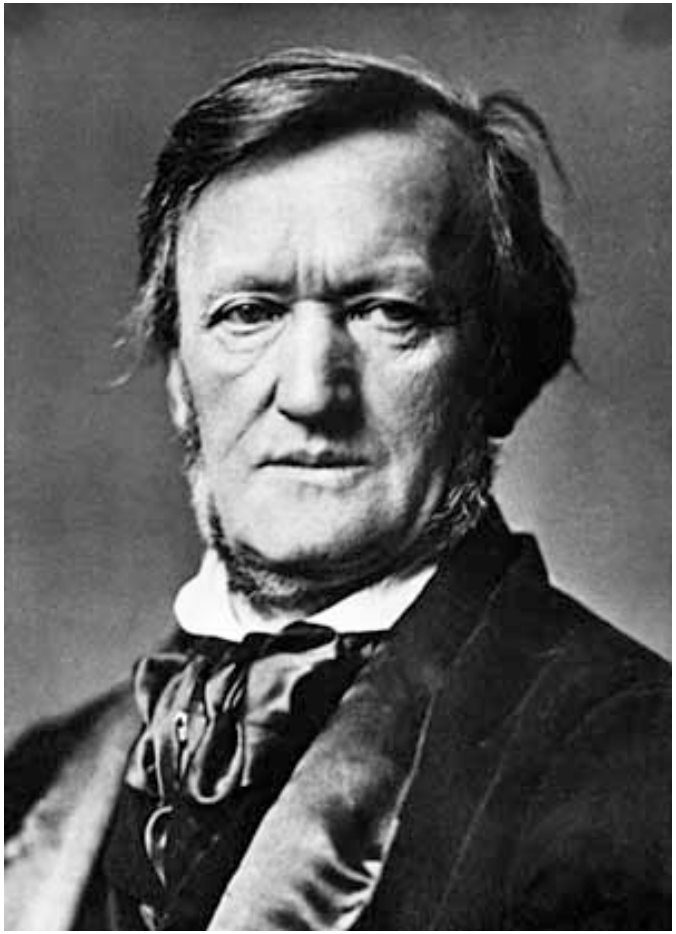
ピョートル・チャイコフスキー
Peter Llyich Tchaikovsky
（1840 - 1893）

『弦楽セレナード』op.48 (1880)より
第2楽章

交響曲第6番ロ短調Op.74「悲愴」

（上記の曲に限らず）
甘美な旋律、大規模なオーケストラ、
夢のある物語を題材とした曲、など、
まさにロマン主義を代表する作曲家。
後の物語映像のための音楽にも大きな
影響を与えた。

ロマン派の作曲家



リヒャルト・ヴァーグナー
Richard Wagner
（1813 - 1883）

楽劇《トリスタンとイゾルデ》(1859) 前奏曲

楽劇《ニュルンベルグのマイスタージンガー》(1868) 序曲

古代のギリシャ悲劇の中に、理想的な「文学と音楽」の融合を見出し、それを「楽劇」という「未来のオペラ」の中で実現させた。
上の曲冒頭に聞かれる和声は「トリスタン和声」といい、調性和声の枠組みの極北といわれる。

※補足

※ただし、ロマン主義に限らず、歴史・文化といった、
あらゆる人間に関わることなど、

本来、単純に解りやすく説明したり、
理解できたりするようなものではない。

それを強引に単純に説明するならば、
必ずそこには、不足や誤りが生じる。

※補足

→　文化や人間のような「解り難いもの、正解が得難いもの」

それを、各自が、

いかに自らで整理するか　（それがデザイン!?）、
いかに自らの正解とするか（それがアート!?）

※補足

→　文化や人間のような「解り難いもの、正解が得難いもの」

それを、各自が、

いかに自らで整理するか　（又、それがデザイン!?）、
いかに自らの正解とするか（又、それがアート!?）

この営みが大学で「勉強する」ということではないか

参考文献

- 国安洋 (1991)『〈藝術〉の終焉 』春秋社
- 佐々木健一 (1995)『美学辞典』 東京大学出版会
- 西村清和 (1995)『現代アートの哲学』 産業図書
- 神林恒道・太田喬夫 (1999)『芸術における近代』ミネルヴァ書房
- 岡田暁生 (2005)『西洋音楽史:「クラシック」の黄昏』中公新書
- 松宮秀治 (2008)『芸術崇拝の思想:政教分離とヨーロッパの新しい神』 白水社
- ドナルド・H・ヴァン・エス(1981=1986)『西洋音楽史:音楽様式の遺産』 新時代社
- 小田部胤久(2008)『西洋美学史』 東京大学出版会
- クリストファー・スナイダー『図説 アーサー王百科』原書房